

### 腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第四十四弾

## 神社本庁再生への道—その七

### 田中—打田体制の卑劣な手口を許すな

### —良識派は団結して対抗せよ

### 藤原登 (フリーライター)

コロナ禍の中で2020東京オリンピックが開演した。それも、開演式演出関係者の過去のいじめ自慢や種差別行為が露見し、本番直前に相次いで解任されるなど、相変わらずの迷走振りだ。開幕中も何が起るか分からないが、大過なく競技が進行することを心から願うばかりだ。メダルの数や色よりも、無事に終わることが国民共通の願いだろう。

#### 週刊新潮スキャンダル 記事の真つ黒な背景

それでは本題に移ろう。オリンピックと同様に強固な利権構造のもとで神社界を蝕む神社本庁の田中—打田体制であるが、その正体が白日のもとにさらされる日も近づいてきた。しかし、利権による求心力で結束してきた彼らは、ここに来てなりふり構わぬ手段に打って出た。利権構造の維持に障害となる関係者の追いつきと工作の拡大である。故に、利権構造に起因するスキャンダルが続出し、様々な矛盾を抱えたまま開幕に至ったのである。今後のスポーツ界は、利権や政治との距離に留意しながら、原点に立ち帰って進んでほしいと願うばかりだ。

#### 幡宮の吉田茂穂宮司が神社境内にあるカフェを運営する女性と親密な関係にあり、高額な報酬が支払われているという。内部リークと思われる記事である。

しかし、この記事をよく読むと不審な点がいちもあふれる。まず元ネタが一年も前に鶴岡八幡宮の総代に送られた「怪文書」に「田中—打田体制の仕組んだ陰謀」というのが、関係者の一致した見方である。

賢明な読者は思い起こしてほしい。吉田宮司は、二年前の神社本庁の役員改選に際して、四期目を目論む田中総長の対抗馬として神社本庁正常化を願う関係者の期待を集め、理事選挙に臨んだ人物である。結果は田中総長側の不正選挙工作により落選してしまっ

た。今も神奈川県神社庁として正常化を願う人々の期待を集める吉田宮司は、田中—打田体制側にとり目障り極まりない存在である。故に、スキャンダルをでっち上げて鶴岡八幡宮の宮司としてこの立場にダメージを与え、あわよくば神社ごと乗っ取ることを狙った「田中—打田側の仕組んだ陰謀」というのが、関係者の一致した見方である。

事実、新潮の記事にあふく名の退職者とは、怪文書に関わったこの社側の調査で露見した工藤綱宣(当時)及びそのグループが大半であり、この下氏は数年前鶴岡八幡宮から神社本庁に出入していた際、疑惑の総元締めである神道政治連盟打田文博会長の子飼

い筆頭職員、小間澤渉外部長の下で研修をしていたということだ。新潮記事の背景には、田中—打田体制の黒い影が其事に浮かび上がっている。この小間澤部長こそ一年前にダイヤモンド・オンラインに部下である女性との不倫疑惑を証憑写真付きで報じられた人物であり、同氏が、田中総長や打田会長からの恩義に応えるために計画した可能性もある。社内不倫が露見しても総長から不問に付された職員が、組織の正常化に取り組む反総長派の中心人物を女性問題の捏造で失脚を図るといふ、ドラマでも中々見られない筋書である。

怪文書による人事介入や印象操作は、田中—打田体制の常套手段である。今回は総代に送りつけた怪文書が今回の発端であったが、これまでも田中—打田体制は、狙いをつけた神社を乗っ取るため、様々な工作を繰り返してきた。神社本庁が送り込んだ元職員の小野崇之宮司のもとで地元の信頼関係が完全に損なわれた宇佐神宮問題の原因が、田中—打田体制による乗っ取り工作であることが、その後の情報から明らかである。第二段階は、内部の神職に対する工作であった。内部に協力者を置くことで情報が入りやすくなり、その後の工作も容易になる。続く第二段階が、宮司ととも神社の運営に責任を有し、宮司の任職にも一定の権限をもつ責任役員や総代への工作である。彼等は神社の包括団体である神社本庁の総長が、まさか神社を乗っ取るかと企んでいるとは思えないはずである。責任役員や総代には地元の名家が、数名しかいない責任役員の中には、一人でも有力な協力者が出来れば、田中総長の子飼い神職を宮司として送り込むまで時間の問題となってしまう。事実、宇佐神宮ではそれが成功してしまっ

た。同様の事例は宇佐神宮だけに限らない。数年前の靖国神社の宮司人事をめぐる騒動を思い起こしてほしい。神社の重要事項を決する総代会の中で、徳川宮司の退任を求めた声が上がったのは、神社総代に送りつけられた徳川宮司を非難する怪文書が切っ掛けだったという。その中で、総代の一人である田中総長がどんな立場であったかは容易に想像がつく。まさか他の総代も、神社本庁総長の職にある人物が、神社本庁の包括下ではない靖国神社宮司の追い落としを画策しているなどは夢にも思わないだろう。

この他、石川県の気多大社で二十年以上に勃発した宮司人事をめぐる騒動も、攻撃対象の宮司を中傷する怪文書がバラまかれ、責任役員の人事に神社本庁が介入したことが発端であった。そして神社側は、神社本庁の離脱を決意したのである。

田中—打田体制による神社乗っ取りの手口は、神社職員や責任役員、総代への工作など、計画的に進められていく。怪文書を利用した印象操作も実に巧妙だ。先人が積み上げてきた神社本庁に対する信頼を餌にして信用させ、神社本庁の方針に反対することはあたたかき罪悪感であるかのように印象付けののだ。こうして下地を整えた上で、最後は数名の「お友達」で構成する人事委員会の力を使って、有力神社の宮司を思い通りにしてゆく。

裏を返せば、神社本庁そのものが二十年の長きにわたり、田中—打田氏を中心とする不逞分子に乗り取られた状況となっているのだ。もはや一日たりとも、現体制の存続を許してはならない。全国二万人の神職が應司統理のもとに団結し、直接声を挙げ行動することこそが、完全解決への近道である。

藤原 登 (ふじわら のぼる) 昭和二八年、東京に生まれる。昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。